



博物館新聞と博物館館報と
伊藤浩司先生

企画展「釧路市立博物館館報 65年の歴史」の開催にあたり、1952年創刊の「博物館新聞」、101号から名称が変わった「釧路市立郷土博物館館報」、その後の「釧路市立博物館館報」をひとつおろざっくりと見てみた。博物館新聞第1号の発行は1952年1月で、当時は毎月発行されていた。

片岡新助初代館長が館報150号で創刊当時を振り返り、「第1号発行に際しては伊藤君は企画と共

に原稿集めから印刷まで一人で引き受けられた形であった」と書いているが、その「伊藤君」が北海道を代表する植物学者伊藤浩司先生(1930-2014)である。直接の面識はなかったものの、学生時代から文献や標本で間接的にお世話になることが多く、「先生」と呼ぶのが習慣になっている。

学会誌に掲載された追悼文によると、伊藤先生は北海道釧路高等学校(現在の釧路湖陵高校)卒業後、北海道大学進学までの3年間釧路市教育委員会と釧路市立郷土博物館に勤めておられた。その最後の3ヶ月が博物館新聞1~3号の発行時期であり、通常業務に加えて新聞発行に奔走した上に大学進学のための勉強もされていたという事実にとだただ頭が下がる。

伊藤先生が命名に関わった植物はいろいろあるが、釧路地域で一番耳にするのはクシロハナシノブ *Polemonium caeruleum* L. subsp. *laxiflorum* (Regel) Koji Ito var. *paludosum* (Koji Ito) T.Yamaz. であろう。植物の学名には亜種、変種などの種内分類群がありややこしいのだが、この長い学名の中の「Koji Ito」が、伊藤先生が命名に関わった証拠である。

私は偶然の縁で釧路に来ることになったのだが、その釧路で再び伊藤先生と間接的に関わることとなった。館報企画展の準備をする中で、この不思議な縁を館報の片隅に残しておきたいと思い、チャランケチャシ執筆の手を挙げたのであった。(加藤ゆき恵)

『ゴールデンカムイ』が熱い!!!

『ゴールデンカムイ』(週刊ヤングジャンプで連載中)は2016年にマンガ大賞を受賞した大人気漫画です。明治時代後期の北海道を舞台に、日露戦争の帰還兵、“不死身の杉元”とアイヌの少女、アシリバを主人公に網走監獄の脱獄囚や帝国陸軍第七師団など個性豊かなキャラクターが多数登場します。またエゾオオカミやヒグマといった、当時の雄大な自然環境を象徴する野生動物や、アイヌ文化についても詳しく紹介されています。作者の野田サトル先生は膨大な量の文献を読み込み、各地の博物館を訪問し史実からインスピレーションを得ながらリアリティーにこだわった作品づくりをすることで知られています。

かねてから同作の大ファンであ

った私は、2017年1月作者の野田先生にあてて手紙を書きました。自分が釧路市の博物館で働いている学芸員でイトウやキタサンショウウオの研究をしていること、ゴールデンカムイの大ファンであることなどを書き、「是非とも当館に取材に来てください!」というメッセージを最後に添えました。

それから1か月ほど経過した頃、先生ご本人と編集スタッフの方の4名がご来館されました。「遅くなりましたが、やって来ました。」という先生の手には私の出した手紙が握られていたのを覚えています。熱心に展示をご覧になったの感想は、見応えがあって作品づくりのインスピレーションを得たこと。その後さらに詳細な情報をメールにてやり取りするようになりました。広範な分野の情報を集めた上で作品づくりをするのが野田先生のスタイルです。道東地

方の自然と歴史について当館学芸員の総力を結集!?して取材協力をしました。

先生からの質問はたいいていよく調べた上で不明な点を聞いて来られるので、回答を考えるのも正直なかなか大変な作業でした。それでも結果として、作中には釧路湿原や当時の釧路の街並みだけでなく、タンチョウ、キタサンショウウオ、イトウといった多くの動物や、当館の2階展示室にある板綴舟も作中に登場しました。

野田先生にいただいた直筆のイラスト入りサイン色紙は、現在4階展示室で展示しています。また今年の4月からは、同作がアニメ化され、道内では札幌テレビで放送されます。今年もゴールデンカムイからますます目が離せません!

(野本和宏)